

青木繁「海の幸」誕生と日露戦争の時代 ⑤

講師 愛沢 伸雄（NPO 法人安房文化遺産フォーラム代表）

日本を代表する洋画『海の幸』は、1904（明治 37）年夏、40 余日小谷家に滞在した青木繁によって描かれた。この夭折の画家は河北倫明氏をはじめ数多くの研究者によって世に出され、『海の幸』は日本美術史に位置付けられ国重要文化財となった。



【石橋財団ブリジストン美術館蔵】

ところで 2005 年から館山市富崎地区では漁村のまちづくりに取り組みながら小谷家住宅を市有形文化財とし、地元はもちろん全国からの支援で小谷家住宅修復事業をすすめ、昨年青木繁「海の幸」記念館として開館した。その経緯のなかで、小谷家からは明治期の水産業など人びとの動きを知ることができる貴重な資料が発見された。

これまで青木繁『海の幸』誕生について、明治期の館山・富崎の地を踏まえた地域史からの視点、とくに日露戦争の時代のなかで小谷家に関わる人びとや漁村の文化的な交流の視点からの考察は限られている。また、青木らの布良訪問や『海の幸』誕生の背景についても、美術史的な視点や青木繁の関係者のみの証言で語られてきた。

本報告では、発見された資料から青木繁が訪れた布良の地や小谷家に関わる人びとの姿、とくに「海軍望楼」という軍事施設や「帝国水難救済会布良救難所」が設置され、ときに軍事演習の地であった景勝地・布良の姿、また布良沖のウラジオストク艦隊の動きによる危機的状況など、日露戦争の戦時下、富崎の人びととの交流にもふれ、なぜ 40 余日も小谷家に逗留し、しかも絵画制作ができたのかを含め地域史の視点から私なりの考察をしたい。

< 目 次 >

- | | |
|------------------------------------|--------|
| 1. これまで書籍に記載される「通説や証言」をみる | 2 ページ |
| (1) 青木らの布良訪問の背景をさぐる | |
| (2) 「海の幸」誕生の背景をみる | |
| 2. 小谷家資料や国会図書館にある明治期の「布良」を紹介した資料 | 7 ページ |
| (1) 青木繁が訪れた景勝地・布良 | |
| (2) 布良の医者 | |
| 3. 青木繁らが逗留した小谷家をさぐる | 12 ページ |
| (1) 小谷喜録とその家族 | |
| (2) 石井家の人びと | |
| 4. 日露戦争のなかの「布良海軍望楼」と「帝国水難救済会布良救難所」 | 19 ページ |
| (1) 東京湾要塞の最前線「布良」 | |
| (2) 日露戦争勃発と要衝の地「布良」での動き | |
| (3) 「帝国水難救済会布良救済所」と日露戦争 | |
| 5. 日露戦争時下の富崎の民衆と青木らの姿 | 28 ページ |
| (1) 富崎・漁村の姿をみる | |
| (2) 漁村のまちとくらしをみる | |
| (3) 地域と青木繁から日露戦争を考える | |

5. 日露戦争の下での富崎の民衆たちとの青木繁らの姿

(1) 富崎・漁村の姿をみる

「梅野書簡」で布良の漁業を「漁場として有名な荒っぽい処だ」というだけで、なぜ遭難事故は語っていないのか。

① 海軍大臣と逓信大臣に提出

「海軍望楼電信利用之義二付請願」からみる

1896 (明治 29) 年 12 月

富崎村は漁業を専業として安房沿海中では屈指の大漁村で、戸数 600 余戸人口 3 千有余、漁船 300 有余隻があり、最寄りの 3 ケ村の戸数を合わせると 5 千戸人口は 1 万 7 千で、漁船総数 900 余隻で各種の漁業を営み、輸出額も非常に増加しているので、東京その他各地の商売もしくは出稼水夫等、多数の人員を集める地である。頗る繁盛している漁場で布良港内に日々出入りする商船も多数に加え、漁猟多獲の際には商業取引も活発で景況なので、市場の水産漁価格等も周知させる必要がある。殊に生魚の輸出における瞬時の商況に関わり水産取引についても深く電信架設の必要を感じている。

水難救済について、布良瀬なる危険な場があり、地域では鬼ヶ瀬と呼んでいる。潮流が激しく最も陰悪なる難所として渡海する船舶の難破があり、航海者が最も警戒している。加えて平砂浦の海岸は鬼ヶ浦とも呼ばれる海域で、洲崎岬をめざして通過していく際に船舶のなかには進路を誤って座礁するものが少なくない。明治 23 年 8 月に米国船ハルシヨン号、12 月に日本郵船会社の東京丸、明治 25 年 1 月に米国船ショーイナ号、明治 28 年 9 月に米国船ベルジツク号の他、西洋形や和船の国内船も含めて多数難破しており、救護のために如何しても電信が必要である。

富崎村は鮪延縄漁が著名地であり、近年は船体諸具に改良を加えて、遠洋漁業に適するようにしたので専ら遠洋に航行し業を営んでいる。その結果、利益は多くなったものの危険も頗る多くなり漁船が難破するようになった。明治 23 年 1 月 24 日の暴風雨では、数百の漁船が遭難したので汽船を雇って搜索し、明治 25 年 4 月 1 日は安房国沿海で破船 15 隻、溺死漂流者 46 名を出し、明治 26 年 2 月の鮪延縄船 9 隻乗員 77 名が遭難した時は、救護を館山湾の天城艦に訴えるとともに横須賀鎮守府に電報し、軍艦八重山号での搜索をお願いした。年々、漁民の水難が多くなり救護搜索のために切実に電信の必要を感じている。

② 富崎村の概要

村政の主な出来事 富崎村漁業沿革史 (大正 13 年)

1889 (明治 22) 年	布良港修築・布良相浜合併で富崎村となる。	
	神田吉右衛門が村長就任。千葉県事業で鮪延縄改良漁船建造	
1890 (明治 23) 年	道路改修	
1893 (明治 26) 年	富崎小学校新築	・鮪漁船数 61 隻のうち遭難 4 隻
1894 (明治 27) 年		・鮪漁船数 62 隻のうち遭難 4 隻
1895 (明治 28) 年	隔離病舎新築	・鮪漁船数 61 隻のうち遭難 6 隻
1896 (明治 29) 年	洋式帆船豊津丸建造・第 1 回水産談話会	
	船頭認定証公布	・鮪漁船数 57 隻のうち遭難 2 隻
1897 (明治 30) 年	第 2 回水産博覧会「豊崎政吉考案改良鮪延縄船雛形」出品	
	第 2 回水産談話会・石井嘉右衛門が村長就任	
		・鮪漁船数 54 隻のうち遭難 1 隻
1898 (明治 31) 年	防波堤修理	・鮪漁船数 52 隻のうち遭難 4 隻
1899 (明治 32) 年	満井武平村長就任	・鮪漁船数 52 隻のうち遭難 4 隻

1900（明治 33）年 護岸波除工事・第 3 回水産談話会
 1901（明治 34）年
 1902（明治 35）年 布良漁業組合創立 ・遭難 8 隻 51 名死亡
 1903（明治 36）年
 1904（明治 37）年 帝国水難救済会布良救難所創立
 1909（明治 42）年 役場庁舎新築・豊崎政吉船大工により富崎丸建造

（２）富崎・漁村のまちと暮らしをみる～写真と絵画・スケッチからみる



富崎の町並み

富崎館



吉野屋



布良港

布良港



阿由戸浜の海女たち 1931 年

布良港の富丸 1915 年



● 青木繁と福田たねにとっての布良

福田たね 1960 年



青木繁スケッチ 1904 年



青木繁「帰漁を待つ母子」1904 年



青木繁 「運命」1904 年



青木繁スケッチ 1904 年



福田たね



青木繁 「梅野満雄絵入書簡」1904 年



青木繁「布良藻屑拾」1904 年



福田たね 1960 年



坂本繁二郎や森田恒友の布良でのスケッチなどは確認できなかった。

【石橋財団ブリジストン美術館蔵】



『青木繁・坂本繁二郎とその友』竹藤寛著 平凡社 1991 月

「幻の坂本・梅野編「青木繁画集」の出版計画をめぐって」のなかで 1934（昭和 2）年頃に画集出版作業がなされているが、そのなかに「図版解説…二八、海の幸 出品の期迫りて、僅かに一週間ばかりに創作せるものにして、後日中央人物の画面二個を塗替たり。前のモデルは坂本繁二郎氏にして後のは森田恒友氏、先頭の老漁夫、房州布良小谷喜兵也。（画中の女性（福田たね）のモデルについて触れてないのは面白い）」

①「日露戦役従軍者氏名」石碑をみる（明治39年10月）



陸歩一等卒	陸輜重輪卒勳八等	海一等水兵	陸歩上等兵勳八等功七級	陸歩一等卒勳八等功七級	陸輜重輪卒	全	全	全	陸歩一等卒	全勳八等	陸歩一等卒	全勳八等	陸歩二等卒	陸輜輪卒	字田川金太郎
村田菊藏	鈴木源七	黒川七之助	島田國太郎	青木市太郎	青木三重郎	鈴木寅吉	天野繁治	黒川芳太郎	鈴木定吉	庄司定吉	鈴木定吉	鈴木定吉	鈴木定吉	鈴木定吉	鈴木定吉

石碑のなかに刻まれる「石井清治郎」がないのはなぜか。また「青木市太郎」が石碑では「青木市太」となっている。なお兵士の階級は『石碑』では「旅兵」となっているものが、『郡誌』では「歩兵」となっている。

布良の神田区墓地には、日露戦争従軍した「沼野熊吉」が金鵄勲章をもらい、帰村するが、明治 41 年 1 月、難し亡くなったと刻まれた石碑がある。これは日露戦争の遭難死だったことを悼み仲間たちが建立したと思われるが「203 高地」攻撃を命じて多数の死者が出た突撃部隊の要塞攻略戦で生き残った人物といえる。



(3) 地域と青木繁から日露戦争をみる

①近年の「青木繁」研究からの指摘

これまでの「海の幸」の研究では、1904（明治37）年2月からの「日露戦争」との関連でいえば、地域の動きを踏まえて解釈していくことはあまりされていない。このことを2006年に開催された「国際シンポジウム『戦争と表象／美術 20世紀以後』（2007年美学出版）」を主催（文科省科学研究費に関わる千葉大学独立大学院博士課程社会文化科学研究科研究発表）した実行委員会代表の長田謙一氏は『再考・青木繁「海の幸」（一九〇四）』論文を発表している。ここで指摘していることをみると、これまでの河北倫明などの調査研究のベースは、地域史的な視点ではなく、青木繁の書簡や著作をはじめ関係者の聞き取り調査や証言などを主流とした解釈であり、当時の日露戦争という時代を踏まえた「青木繁論」が見当たらないと述べている。「海の幸」制作についても美術史的な視点からの解釈が主なもので、地域の歴史文化を考慮しての解釈は神話的なことなどに限られてきたといえる。それは青木繁が布良に写生に来た時期の資料が少ないという制約があり、やむを得ないかもしれない。

ここでは長田論文の美術史的な指摘には深入りしないが、「海の幸」誕生のなかで、当時の布良から青木がとらえた日露戦争の関わりを考察していくことは重要なことである。前述したなかに日箇原繁という人物と「画報社」を取り上げるなかで、坂井義三郎という人物が、画報社で発行している美術雑誌『美術新報』の編集であったとふれた。

長田論文では、当時の『美術新報』のあり方を指摘しているように、日露開戦とともに誌面には頻繁に戦争が大きく取り上げられ、戦時色を強く打ち出していくなかで、美術展覧会などでも戦争に呼応していく動きが急展開していったと指摘している。これまでの研究では日露戦争という情勢のなかで、青木繁が戦争に関わり美術的な取り組みをしたとの報告は聞かない。つまり、生活が困窮していた青木が戦争に関わるような絵画やスケッチを描いたとか、ましてや戦争を賛美するような「戦争画」を描いたとの指摘はない。

そのなかで長田論文では、青木に「日露戦争」に関わっていく契機になったことを6月

15 日の「常陸丸の犠牲」と呼ばれる出来事をあげている。この事件は前述したように、ロシアの「ウラジオ艦隊」が兵員輸送船「常陸丸」(ひたちまる)を撃沈したことで、戦場に向かう陸軍が 958 名、海軍が 3 名、そして乗組員 130 名の総計 1,091 名が亡くなっている。第 2 艦隊がウラジオ艦隊の捕捉を失敗したことが、多くの人員の犠牲を生み、国民に悲痛な気持ちもたせたという。第 2 艦隊の上村司令官には、多くの国民的な義憤を呼び起こした。8 月 21 日、東京・青山斎場で葬儀は挙行政され新聞でも大きく報道された。国民には日露戦争の生死のあり方がどうか、その姿を強く印象づけることになったという。

今回の報告は、富崎・布良の地から日露戦争がどのような意味をもっているかの一端を紹介した。戦争が展開していくなかでの軍事的な地の布良を位置付け、これまでの通説や証言を検証しながら、青木らは軍事的な出来事があった「布良」という地域から、どう戦争に向き合ったかを私なりに考察してきた。限られた資料のなかで極めて不十分な報告であった。しかし、これまでの青木繁や「海の幸」研究を地域史の視点から一石を投じるものになっていくことを願っている。

② 青木や坂本は日露戦争をどう見ていたのか。

A. 「河北」研究

河北倫明『青木繁と坂本繁二郎』雪華社 昭和 40 年

「…日露戦争の後、ある部隊で戦死者の慰霊祭が行われたときのことだ。衛兵が厳重に見張っていて、関係者以外は入れてもらえない。やがて読経がすんで焼香が始ろうとする。そこへシルクハット、モーニングに威厳を正した青木がお供を一人つれて颯爽とやって来た。真一文字に祭壇へ向かっていく。近づいて恭しく最初の焼香をすませ、ふたたび颯爽と衛門を通ってゆく。そして慌てて敬礼する衛兵をしり目に彼は悠然と立ち去ったというのである。これは目撃した友人の一人から聞いたのだから、おそらく事実だろう…」

B. 坂本繁二郎は

『私の絵 私のころ』1969 (昭和 44) 年 日本経済新聞社

「…兄の死であきらめていた上京の夢は前にもましてつのも、それは目前に迫った徴兵検査で不合格になりますよう、母の許しが出ますよう祈る気持ちの連続でした。検査は乙種でした。ちびが幸いして、背丈が規則の百五十三センチより三ミリたりなかったのです。こんなことはいまだからそこ言えるのでしょう。」

坂本家は武家出身であり、当時の国情からいっても不合格になること自体その家の恥でした。しかし本心のところ、私は自分の背の低さを喜び、これほどほっとしたことはありません。翌年の明治三十六年から身長基準が一寸下げて五尺までになりましたから、あと一年おそく生まれていたら日露戦争にかり出されていたでしょう。久留米連隊は強いことで知られ、現に私の友のなかに遼陽の激戦で戦死したものがたくさんおります。ただその時の私は、これで絵が描ける、東京に行くための難関をひとつ突破できたといううれしさだけでした。」